

9. 蛸島町の結婚儀礼

谷 田 彩 香

1. はじめに
2. 結婚式の個別事例
3. 結婚儀礼の基礎要素と変容
4. 現代の結婚事情と展望
5. 考察
6. おわりに

1. はじめに

蛸島町で多くの方にお話をうかがっていた際、「結婚式のときにはお嫁さんに縄をはってねえ…」というお話を何度も耳にした。これは蛸島の人々に「ナワハリ」と呼ばれているそうだが、この今まで自分が聞いたことのない習慣にとっても興味が湧いた。そして、絶えず変化し続ける社会の中で、このような地域で行われる習慣はその社会の変化にどのような影響をうけるのだろうかと考えた。

そこで、この章では年代ごとの個別事例を挙げて、蛸島町の結婚儀礼に関して詳しく調べることで、「ナワハリ」を含む結婚儀礼がそれぞれの時代においてどのように行われてきたか、また時代の流れのなかでの変化について考察する。まず2節では、自身が蛸島で結婚式を挙げられた方に聞いた話を個別事例として年代ごとに述べる。3節ではその個別事例として聞いた結婚式を要素ごとに比較し、それぞれがどのような変遷をたどってきたのかについて考える。4節ではそれまで述べてきた蛸島の結婚儀礼が現代においてはどのようなになっているかについて理由を考えながら述べる。

2. 結婚式の個別事例

2.1 昭和20年代（Aさん、諏訪町、女性、80歳代）

蛸島生まれのAさんは、同じく蛸島生まれの漁師の夫と21歳のときに結婚した。夫がイカ釣り漁船に乗っていたため、半年に一遍ほどしか帰ってこず、結婚式もその期間を見計らって行われた。結婚式当日は、家で赤飯のおにぎりを食べてから、まだ日の明けないうちに母親・髪結師とともに、新郎の家は海沿いにあったため、船に乗って家の下まで来た。結婚式より前にリヤカーで新郎の家に運んできた嫁入り道具には、和ダンス・長持・鏡台・布団・下駄箱・タライと波板のほかに、ミシンや輪島塗のお膳などもあり、大工だった祖父の手作りのダンスも持ってきた。式の前に家には、迎え酒といって、近所の人たちが一升瓶に一合ほどの酒を入れて持ってきて、この酒で杯を交わした後、一升瓶をお酒でいっぱいにして返すことをした。

Aさんは白無垢を着て式に臨み、ナワハリでは新郎の家のある地区内の人が縄を張ってくれていたが、この時の縄は赤と白の布を編み込んだ紅白の縄であった。玄関で杯に花嫁の家の水と新郎の家の水を混ぜたものを花嫁が飲む、アワセミズを行ったあとその杯は仲人が投げて割った。アシアライはせず、神棚、仏壇と順に参ってから結婚式が始まった。式が始まる前まで、嫁入り道具は会場となる新郎宅にて披露され、見せびらかされていた。新郎は結婚式の当日ずっと友人の家に隠れていたため、イワシのハラアワセ、式の三三九度などは一人で行った。本膳での料理は近所の人がつくるのではなく、雇った料理人が前日から腕を振るってこしらえたものだった。白無垢から本膳の最中に黒の振袖、紫の色留と宴会中にもかかわらずお酒をあまり飲むこともなくお色直しをした。日が明けた次の日、写真屋が来たころ新郎もやっと家に戻ってきて、一緒に写真に納まって式は終わった。その後新婚旅行に行くことはなかった。

結婚式の次の日にアトシキが行われて、式に参加していない近所の人たちと新郎の男友達が呼ばれて宴会が開かれ、新郎の両親がもてなした。里（花嫁の実家）からは結婚式から3日たったころにまんじゅうと酒が届いた。結婚式から1週間ほどたってから、Aさんはサトガエリをした。嫁ぎ先の家がまんじゅうと酒を用意してくれて、それを持って帰り実家の近所の人たちに配った。

2.2 昭和30年代（Bさん、仲町、女性、70歳代）

Bさんは飯田出身の方で、のちに仲人を務めてくれることになる、同じ飯田に住む会社の同僚から蛸島に住む今の旦那さんを紹介された。22歳の時に結婚し、結婚式の1週間ほど前に親戚の人たちに頼んでトラックで新郎の家に嫁入り道具の搬入を行った。その日は多くの近所の人たちが運ぶ様子を見に来ていたそうである。和ダンス・洋ダンス・布団ダンス・布団・白、黒、紋付の着物・下駄箱・鏡台・タライ波板・ミシンのほかに、洗濯機や掃除機といった電化製品も嫁入

り道具として持って行った。結婚式当日に Bさんは黒地の花模様の着物を着付けてもらった後、ナワハリをさけて、午前中の中にタクシーで仲人・親戚二人とともに新郎家へと向かった。ナワハリは二階から見ていて、仲人は縄を張っている人たちにお金を渡しに行ってくれるのを見ていたそうだ。この時の縄は普通のわら縄であった。また、2階からは105円や5円の入った袋をまいた。

結婚式ではアワセミズとアシアライは行っておらず、神棚、仏壇とお参りした後、夫婦そろって紅白の小さい餅を食べ、三三九度を行った。式および本膳には新郎とともに参加して、式が終盤に差し掛かったころになると仲人が決めた大きさの杯で酒を回し飲むオオサカズキも行った。親戚みなが酒を交え、祝いの歌や民謡を歌いあう様子はとてもにぎやかで、蛸島らしいと感じたそうである。次の日には早朝から母親と仲人とともに、近所の人と親戚に訪問着を着てあいさつ回りをした。今ではその習慣はなくなっているそうだが、訪問先の人たちはあいさつしに行くと、のし付きの封筒に1000円を入れたものをお盆に載せて持ってきてくれたそうである。そのあとアトシキを行い、新郎の友達を主として近所の人も呼び、もてなす側として参加した。

ご祝儀によって数や量に大小をつけて、地区内の人すべてにマンジュウガエシを行い、日本酒とまんじゅうと風呂敷を渡した。それから1週間ほどしたのち新婚旅行に向かった。旅行から帰ってくると、飯田の方にサトガエリをした。期間としては1、2日ほどであったが、まんじゅう、酒、風呂敷を持って行って、近所の人たちに配った。自営業の関係で、仕事が休みの時になると飯田に帰っていたそうである。

2.3 昭和40年代 (Cさん、島の地、男性、60歳代)

Cさんの奥様は、Cさんと同じ町内の方で、お見合いで知り合ったそうだ。当時海に長く滞在する仕事の関係で、結納はCさん抜きで両家が食事会を行う程度の軽いもので済ませ、結婚式はCさんが仕事から帰ってきているわずかな期間に合わせて開かれた。嫁入り道具には和ダンス・洋ダンス・布団ダンス・着物・鏡台・ミシンや洗濯機などを持ってきて、Cさんの家に道具を運び入れる日には、祝儀やナワハリなどはないものの近所の人は何人も見に来ていたそうだ。当日、Cさん（以下新郎）と仲人は花嫁を家に迎えに行き、花嫁の両親に御膳でよばれたあと、花嫁を連れてタクシーで新郎の家に向かった。この時花嫁は白無垢に文金高島田を結び、完全に着付けされた格好であった。夫妻が町内の境目あたりでタクシーを降りると、新郎の家の50メートル手前ほどからナワハリが行われていて、縄を張ってくれていた人には仲人が1000円を渡して縄を下してもらい、2階からは5円や50円を小さなのし袋に入れてばらまいた。

新郎の家に到着すると、花嫁は薄い杯に両家の水を合わせて飲むアワセミズを行い、花嫁が杯を投げて割り、それが割れて初めて家の中に入ることができた。アシアライは行わず、神棚、仏

壇と参ったのち、新郎と花嫁は親族が輪になって待っている結婚式会場に向かい、三三九度を行った。そして生魚（イワシかどうかは定かではない）のハラアワセも行い、花嫁はそれまで着ていた白無垢から軽い着物に着替えて、新郎とともに本膳に参加した。式も終わりに差し掛かるとオオサカズキが行われ、杯を持った人が「さかなくだせえ」と誰かを指名し、指名された人は祝いの歌や民謡、当時の流行歌など一曲歌わなければならなかった。歌が終わると、杯を持った人は「ありがてい」と言って杯に入った酒を飲むといった一連の流れを、輪を一周するまで続けた。次の日新郎側の家でアトシキが行われ、結婚式を手伝ってくれた近所の人や式に出席できなかった人たちに、新郎の両親から御膳がふるまわれた。その後、新郎側の町内の人にまんじゅうと酒がマンジュウガエシとして渡された。

結婚式から1か月ほどしてから花嫁はサトガエリをし、まんじゅうと酒と風呂敷を持って行って、嫁側の町内に配って回った。まんじゅうや酒はご祝儀によって大小をつけたものであったそうだ。

3. 結婚儀礼の基礎要素と変容

2節で述べた個別事例から、当時蛸島で行われていた結婚式の要素を抽出し、それぞれについての詳細および変化について述べる。

『珠洲市史』（1979年）を基にして、昭和30年代の蛸島の一般的な結婚儀礼がどのようなものかを述べると、まず婚姻を結ぶにあたって親同士の話し合いによる嫁さがしから始まる。仲人を多くの場合親類が務め、家の格などを考えながら二人の仲を取り持ち、結納が行われる。嫁入りのことを珠洲市ではヨメドリといい、このヨメドリの当日、嫁迎えには基本的にはナカドが行き、少なくて二人といったごく少人数で時にはナワハリをさけて夜が明ける前に新郎の家に向かった。新郎の家のある地域の人たちによるナワハリがあり花嫁が通る道をふさいで縄が張られた。仲人がお金を渡して縄を下してもらい、加えて新郎の家の二階からはお金がまかれた。新郎の家についてからの儀式としては、アワセミズ、アシアライの後、神棚・仏壇へ参り、ここで新郎は家から姿を消し、花嫁だけが会場に入り本膳へと進む。結婚式の後には、新郎の関係者などをもてなすアトシキや、マンジュウガエシが行われる。それから1週間ほどして、花嫁は実家にサトガエリする。

3.1 出会いから結婚式前まで

・出会い

かつて結婚相手との出会いといえれば見合いが一般的で、現在行われるような全く知らない人と

お見合いをするというよりは、これまでの顔見知りとすることのほうが多かった。そのため、恋愛結婚は稀であり、同じ蛸島町に住む男女を結婚させるために、それぞれの両親が積極的にお見合い話を持ってきた。結婚は親が決めるものという観念が強く、両者の思いが尊重される現代の「お見合い」とは少し意味が異なるものであった。また、結婚する年齢は、昭和 20 年代ごろは、女の子は 20 歳までに結婚するのが普通とされ、20 歳を過ぎると嫁に行き遅れているとも言われていたそうである。その後、恋愛結婚も一般的になり、それにともなって他市・他県から嫁いでくる人も増えていった。

・結納

蛸島内での結婚において結納を正式な形で行ったという話はあまり聞くことができず、やっていない人が多かった。やったとしても簡単に行い、「向こうの兄弟の分まで布団を贈った」（東脇、女性、70 歳代）や「松竹梅の飾りを贈った」（仲町、女性、70 歳代）など特に決まったものではないが贈り物をしたそう。また新郎が不在の場合も多かった。理由としては蛸島での男性の職業に漁師が多いことが挙げられるだろう。漁業に従事する人が多く、イカ釣り漁船など遠洋の船に乗っていると、半年に一度しか家に帰ることができない。この状況において結婚式を蛸島に帰っているときに挙げるとすると、どうしても結納は新郎不在となってしまったのだった。

「蛸島には嫁に来るな」という言葉があり、これは半年に一度しか家におらず、ほとんど会えない旦那を持つことは、未亡人のような暮らしであるからだそう。この漁師の妻になったことで、結婚しているにもかかわらず暮らしは未亡人のような女性のことを人々は「後家（ごけ）さん」と呼んだ。

・嫁入り道具

嫁入り道具として一般的なのは、和タンス・洋タンス・布団タンス・整理タンス・着物（白、黒、色留）・夫婦の布団と客用布団・鏡台・衣桁・下駄箱などである。そのほかタライと波板は洗濯機が普及した後でも用意したものであった。布団に関しては、金欄緞子とあって、大変豪華なものを用意することもあったという。一家に一揃いはあるといわれる輪島塗の御膳を嫁入り道具として持たせることもあった。電化製品は共有することが多かったため、あまり多くを持っていくことはなかったが、時代が進んで電化製品が生活での重要度を増していくにつれて、嫁入り道具として電化製品をいくつも持っていくことも多くなっていった。

新郎家に嫁入りする者として、花嫁側が使うものの多くを嫁入り道具として持っていくため、運搬はとても大がかりなものであった。およそ式の一週間前に、花嫁側の親類の男たちで新郎の家に運ばれた。運び込む様子は近所の人たちが見に来るもので、今度お嫁に来る人はどのような人かをその花嫁道具から感じ取っていたそうである。また、式の前には、嫁入り道具を見せるために、会場に嫁入り道具を持って来たり、タンスから着物を出して見えるように掛けたりしたそ

うだ。

花嫁側には経済的にこれだけの嫁入り道具を用意するのが楽でないこともあるかもしれない。しかし「娘を嫁に出す際、向こうの家で恥ずかしくない、肩身の狭くないように、自分たちができる精いっぱい仕立てをしてやった。娘がまたその娘を嫁に出すときにも、同じくらいかけてあげられるようにとも考えていた」(東脇、女性、70歳代)と聞き取りでおっしゃられた方もいて、嫁入り道具を豪華で派手なものにするのには、両親の娘に対する親心が大きく関係していたといえる。

3.2 結婚式当日

・ナワハリ (縄張り)

正式なものは赤と白の布を編み込んだ紅白のわら縄で行われるものであったが、次第に普通のわら縄で行うことが一般的になっていった。花嫁がやってくる時間になると、新郎の家の近所の人たちは縄で道路をふさぐようにして二人一組で縄を持ち、花嫁を待っている。縄を張る人は女性や子どもが中心である。花嫁がやってくると、同伴している仲人が1000円を袋に入れてそれぞれ縄を張っている人に渡すと、縄はおろされる。こうして花嫁は新郎の家まで進む。これとともに、新郎家の二階からはお金を入れた袋が道路にいる人にまかれた。このときの金額は決まっているものではないが、5円、50円、105円など「5」が付く金額がまかれる。5を入れることによって、5円(ご縁)と掛けて地域の人々との末永いご縁を祈ったものであったのだと考えられる。これは近所の人だけに限られるものではなく、来ている人みなに対してまかれるものであるため、結婚式があるという噂を聞きつけて駆け付けた子どもたちなどもいたそうである。

しかし、昭和55(1980)年に婦人会が結婚式におけるナワハリを禁止したため、ナワハリが行われることは徐々に少なくなっていった。その理由としては、やはり近所の人たちが縄をはってくれるものであるため、結婚式があるたびに縄を張りに出るのは大変になったということと、毎回縄を下してもらうたびにお金を払うことが少なからず負担になっていた現状があったからだろう。だが、自分がナワハリをしてもらった人たちの中には、自分の娘のためにぜひナワハリをしてほしいと頼んで近所の人たちにやってもらっていたこともあったそう(諏訪町、女性、80歳代)。

今回結婚式に関して聞き取りをさせていただいた蛸島町ではほとんどの方が花嫁に縄を張ることをナワハリと呼んでいたが、珠洲市の多くの地域ではナワバリとも呼ぶ。このことから私は、ナワバリは単に新郎の家にやってくる花嫁を邪魔するのではなく、自分たちの部落のナワバリに新しくやってくる花嫁を迎え入れるという意味を持ち、人々が花嫁の結婚を承認するための手続きの一つと考える。

・アワセミズ（合わせ水）

新郎の家の玄関に入って家に上がる前に、薄づくりの杯に両家の水を合わせて入れて、花嫁が飲み、その後杯を投げて割る。仲人の人が割る場合や花嫁が投げる場合などさまざまであるが、杯が割れて初めて新郎の家に入ることができる。

・アシアライ（足洗い）

アワセミズに続いて玄関で行われるのが一般的で、花嫁は水の入っていないタライに足を入れて足を洗うまねをしてから新郎の家に入った。蛸島の人同士が結婚する時にされたもので、「旅の人」と呼ばれる蛸島以外の地域から嫁に来た人の場合には足洗いは行われなかった。新郎の家に入るときに足を洗うことで、新たに新郎の家の一員として入るという意味があったそうだ。

アワセミズとアシアライは聞き取りをした中でも時代で変化したという話はなく、結婚儀礼として形式を保ったまま行われ続けてきたようである。

・本膳

蛸島だけでなく珠洲市での結婚式において新郎が本膳に参加しないことはごく普通のことである。新郎が本膳の間にどこにいるのかというと、多くの場合、新郎の友人の家だそうだ。それも新郎の家からごく近い場所であるという。本膳の間だけでなく結婚式の当日中は戻ってこない場合がほとんどで、次の日の早朝になってそろりと帰ってきていた。昭和40年代の結婚式の事例では新郎が参加しており、かつてほど厳格に決められた儀式というより、親類の顔合わせの意味合いが強くなっていったように思われる。また本膳のときの花嫁は飲んだり食べたりということはあまりせず、頃合いを見計らってお色直しをするなど、あまり気の休まらないものであった。花嫁の服装の変化としては、白無垢を着て新郎の家にやってきた事例が多く、神棚と仏壇に参った後に色留などの着物に着替えるというものが多かった。中には、「仏壇と神棚に参るときだけ白無垢から赤い着物に着替えた」（東脇、女性、70歳代）といった話もあった。しかし今回の聞き取りから、蛸島では昭和40年代以降の結婚式においては新郎が本膳に参加することが多くなっているようであった。

・オオサカズキ（大杯）

式の終盤に差し掛かると、大中小の杯から一つ選んでお酒を注ぎ、その杯を持っている人は「さかなくだせえ」などと声を掛けて誰かを指名して、その指名された人は一曲歌った後にその酒を飲むといった大杯が行われた。酒を飲み終わった後には、「ごちそうさま」「ありがてえ」などと言述べてから次の人に杯を回した。曲には祝いの歌が多くあったが特に指定はなく、民謡や当時の流行歌を歌う人もいた。大杯は式に参加する人に次々と杯を回していくため、初めて顔を合わせた両家の親族たちが同じ杯の酒を飲みかわすことによって、親睦を深める意味があった。聞き取りから、オオサカズキが結婚式で行われるかどうかは明確な理由はないものの、自宅結婚式

が少なくなるにつれて行われなくなっていったようである。

3.3 結婚式後の行事

・アトシキ（後式）

結婚式の次の日に、式の手伝いをしてくれた近所の人たちや式にくることができなかった人たちを呼んで宴会が開かれ、主に新郎側の男友達などが後式に参加することが多かった。御膳などを準備するのは新郎側の両親で、補助として夫婦も参加し、結婚式のように堅苦しいものではなく、酒をたくさん飲み楽しむ宴会であったという。これもどの時代でも自宅結婚式の後には行われていた。

・マンジュウガエシ（まんじゅう返し）

結婚式の次の日以降に、まんじゅうと酒と風呂敷をくばることをまんじゅう返しといった。まんじゅうの数は 11 個か 13 個にするのが一般的で、酒は町内には 4 合、親戚には 1 升といったように社会的関係の違いによって量を変えて配った。これは、花嫁側と新郎側のどちらにも配られたが、新郎側にはまんじゅうと酒が配られることが多かった。風呂敷には、「これから二人を温かく包み込んでくださいといった願いが込められている」（島の地、男性、60 歳代）という話もあり、新しい夫婦が町に溶け込む一助となっていたことがうかがえる。結婚式がどんどん簡素化、また町外で行われるようになってからも、まんじゅう返しは行っている家庭は多く、現代においても残る伝統として目にすることができる。

・サトガエリ（里帰り）

サトガエリに行く時期は仕事などによって異なるが、結婚式から 1 週間ほどしてからが多いようである。花嫁は実家に帰るとき、まんじゅうとお神酒と風呂敷を持って行って、町内の家に配る。祝儀の大小によってお神酒の量を 1 升、4 合と変える。この里帰りはお針仕事、「へんだく」（＝せんたく）とも言われ、自分の服を直すために持って帰った。また先に述べたまんじゅうなどを「へんだくみやげ」と言うこともある。結婚儀礼に関して聞き取りをさせていただいたほとんどの女性は、結婚したあとサトガエリを経験していた。帰った際に行ったことは人によりさまざまであったため、どの時代でもサトガエリは、結婚式のあとに住み慣れた実家でいったん落ち着くことで、嫁ぎ先で新しい生活を始めるために気持ちを整える期間であったのだと思った。

4. 現代の結婚事情と展望

現在、このような昔から行われてきた結婚儀礼が行われることはほとんどなくなってしまった。その理由としては、結婚式が行われる場所の変化がまず挙げられる。結納から本膳まですべてが

自宅で行われる自宅結婚式から、昭和 50 年代になると、縄張りや神棚・仏壇参りなどを新郎の家でした後に神社で結婚式を行い、そののち料亭でご飯を食べる結婚式のほうが自宅結婚式よりも主流になった。そして現在のように 2006 年に金沢市に造られたララシヤンス太陽の丘などのチャペル様式の結婚式場が増加し、洋風の結婚式が流行したこともあって、結婚に関するすべてを自宅の外で行う結婚式へと変わっていった。

また、もう一つの理由として、若い人たちが進学や就職をきっかけに蛸島から市外・県外へと出て行ってしまうこともあると言える。今回の聞き取りをした 60 歳以上の方たちからは息子や娘が、進学や就職を機に蛸島を離れ、現在はその地で結婚し家庭を持っているという話を何度も聞いた。また、最近参加した結婚式は蛸島ではなく、金沢市内のセレモニーホールで行われるため、はるばる蛸島から金沢まで足を延ばしたというお話も聞いた。最近では結婚式をするときに、市外や県外の関係者および親戚を呼ぶ際の交通面の利便性も考えて、金沢市内で結婚式を挙げることが多くなっているといえる。実際に聞き取りの中でも、「金沢で結婚式をするほうが楽だから」（仲脇、男性、30 歳代）といった言葉もあり、蛸島に住む人々の考え方の時代に伴った変化が影響していると考えられる。

このような背景は、縄張りが禁止されたことにも少なからず影響を与えたと考えられ、そうして人々に縄張りが目にされることは少なくなっていく。結婚式に縄張りなどの地域とのつながりが必要とされなくなったことで、人々の地域の中でのつながりも必然的に希薄なものになっていったのだと思う。しかし現代において近所付き合いが全くなくなってしまったわけではない。自宅結婚式が減り、神社やセレモニーホールで結婚式を挙げるようになってからも、結婚式の後にはほとんどの場合まんじゅう返しが行われていた。こうして形式は簡略化されながらも、昔からの地域とのつながりを大事にする行事は受け継がれていたのである。

また現在、蛸島には漁業について学ぶ多くのインドネシア実習生がすんでいる。あいさつなどをきちんとする彼らと触れ合う蛸島の人々は、外国の人を差別することなく、とても寛容に受け入れている。フィリピンから来た女性を奥さんにしている方なども何人かいらっしゃるそうで、その決して裕福な暮らしをしようとはせず、切り詰めたつましい生活をしている姿を評価しているそうだ。

5. 考察

蛸島での結婚儀礼は自宅結婚式が行われていた昭和 40 年代ごろまでは、縄が紅白のものから普通のわら縄でもよくなったり、新郎が本膳に参加するようになったりと細かい変化はあったものの、基本的に 3 節で述べた基礎要素をすべて行うものであった。そのため、自宅結婚式が盛んで

あった時代には結婚儀礼の一つ一つが一人の女性が一人の嫁へと変わるために必要な要素であると考えられていたといえる。しかし昭和 50 年代に婦人会によるナワハリの禁止と、神社での結婚式の増加が重なったことで、自宅結婚式の減少と自宅で行っていた儀礼が行いづらくなった。それに加えて若い人たちが蛸島を出ていき、また新しい結婚式場が増加することで、結婚式自体が外で行うものになり儀礼を行わなくなったことで、女性が嫁ぎ先の嫁になるという考え方が薄まっていったのだと思う。

実際に 65 歳以上の人口が 4 割を超え、15 歳未満が 1 割にも満たない少子高齢化状態となっている珠洲市において状況は蛸島町も同じであり、蛸島に残る若者は少なく、さらに地域の高齢者の割合が大きくなるであろう。社会増減においても転出が転入を上回る年が長い間続いている、ますます蛸島で新しい生活を始める夫婦が少なくなっていくことは想像に難くない。そうになると、結婚式をすること自体が地域のつながりを強くする一助となっていた昔のようにはいかないだろう。しかし今回結婚儀礼を調べて分かった、時代が変わって結婚式が自宅外で行われるようになって地域に深く根付く人々のつながりは、新たに地域に加わることになる家族も快く受け入れてくれるような温かな雰囲気を作り出しているように思えた。

6. おわりに

今回の調査において、たくさんの方々に話を聞かせていただいた。「ずっと昔のことだから、みんなはつきりとは覚えていないよ」と言いながらも、ご夫婦で質問しあいながら思い出して、結婚式に関して話してくださる様子は、話を聞かせていただいた私にも大変ほほえましく素敵な関係に見えました。蛸島には「女の子 3 人持てば家つづす」「蛸島に嫁は行かれん」（いずれも東脇、女性、70 歳代）という言葉があるそうで、派手で贈与が多いお金のかかる結婚式をするものであったという話を聞いた。金銭面での苦労があっても、きらびやかで豪華な結婚式は、旦那が漁師で海に出てしまっほとんど会えなくても、二人をつなぐ一生の思い出になっていたのだろうかと感じた。また、20 歳までに結婚するのが普通であり、人生において結婚は必ず通らなければならない道であった時代と比べると、女性の権利が確立し、女性一人でも自立して生活していける現代において、結婚は選択肢の一つとしてとらえられるべきものになっているのかもしれないと思いました。

最後に、私たちを温かく迎えてくださった蛸島町の皆様、細かな質問にも丁寧に答えてくださったすべての方に、心から感謝いたします。